四々御法

へ13
196
7

へ13
196
7

大川豊

本重

地
198
7

両個の妻を娶らせ。ともに賢なる後妻の鮮衣に身を伏そ腹よりぞ出る。
あんなが孝行等閑ならふ程ど。父の前妻いとく憎く。活き死にを責虐ぶるを
見て三世の悪報なり。ともあれど人に至誠あるべ天神これを祐地祇これを
助く。禍を轉じ福を来たす。雲おさまりて月顯るる兩の後の花ひらくが如し。
あんなが年来の厄難は今ぞ解けぬ。只その厄と解縁あり良縁に
結ぶをもとなれかと兄人の辭ゆも。大功は細謹をうりとされ文礼を小濃を
辞ざれといわるるや。親の許さぬ縁しるりとも。正未氏の子ゆのあるそのあるを
藉と云い親のみ心に足孝心。志を汲んとなるよ。きく他若旅行して兄人の
菩提を吊ひ。家ゆ餘慶あり。九族見ようの繁昌せば濃り赤ばと否とおんなと
孝女といざるべ兄素卿を怨し唐山婦父の兄なる唐撫子母の兄なる家人
法師。乞目の畳六吾嬬村の根坂ホ中有ホ三熟の苦を脱れつそ

処を好く結りうべこよるに陰徳修善より曉ごや。腹くろに彼人が忙て上給く
赴ぶ。おん身のゐるこれを遠離後世と妹と仕の縁と今宵結ぶる金剛神の
冥助。これ又おん身を護ること。あのづゝ因縁あり原この里を真間といい
継橋と名づけ。こゝ名同字異訓ゆて継ぎに人ゆ虐られ。吾俤ようて
この名あり。おん身又よくこれゆかして氏ハ継橋。その名ハ根継よ苦心名詮自性
よりや同病相憐とも。つゞあり世のつぎくふ。りひくふべていよく惑ひ彼
良縁を結ぶべ一生涯を悟るん金剛神ハ媒妁なり。妙副ハ吾俤なり。婚の郎
女や来ぎ。ろ。ろへくとまを抗く。拒げば忽地外面ろ。正未左金と名告つ。
手いとろに風流士が。辮羅ゆうる打扮。く。縁煩ろで進ぎ入。当奇南の
薫い馥郁と。軒端ゆ折る梅の花一枝敬ゆ異なるべ。缺皿ハ今夕ちづ匹
さゆ沼塩ぞ。て立躱れんとも床堂衾を引くきれく吐嗟と叫ぶ。ろ声よ驚るに

いえまべ。これ假寐の爰ろりけり。原来疲労く。ねるともちろべ目睡ゆに。
枕せ。肱を磨りてえくまべ彼爰ゆえ。風流士ハ。ろが右ゆのろうゆを。
こハ什麼ぞと呆れ惑ひて。せんとべちふべ伏洗ハ左金が後方よえべりふに。
渡るハ真吉と耳語つ小勝をもくあて。缺皿ゆちうに。ゆう。形ゆを稀る今宵の
首尾を彼郎ハ。ゆ知ひて。真吉とゆて。ゆを世ぞも君よく睡てとりせ。ろべ。
いえの。ゆ待ゆくりゆと強面ゆも限りあり。妹仕の縁ハ土雲ゆて。神の泣びせ
うゆふといべ。竟ゆ脱れぬりのぞよ。今宵ハ千世のとゞえりうろ。ろ。ゆ
真吉りろとも。真成ふとろゆちて。備の洮子土器を。ろうゆ。勧ろ三三九度いい
あゆこの床の山よ破屏風を建澆して。夜衣ろち被ぎる新枕類ゆ。と。ハ
渡るを先ゆ立て。柴が臥房へ赴ぶ。ゆ。缺皿を慰て。滅ぶ
告情を述懇よ相潭ゆのふ。缺皿ハ形ぶ。帛蔦ハ彫離。壁崩れ。偏ゆ風美

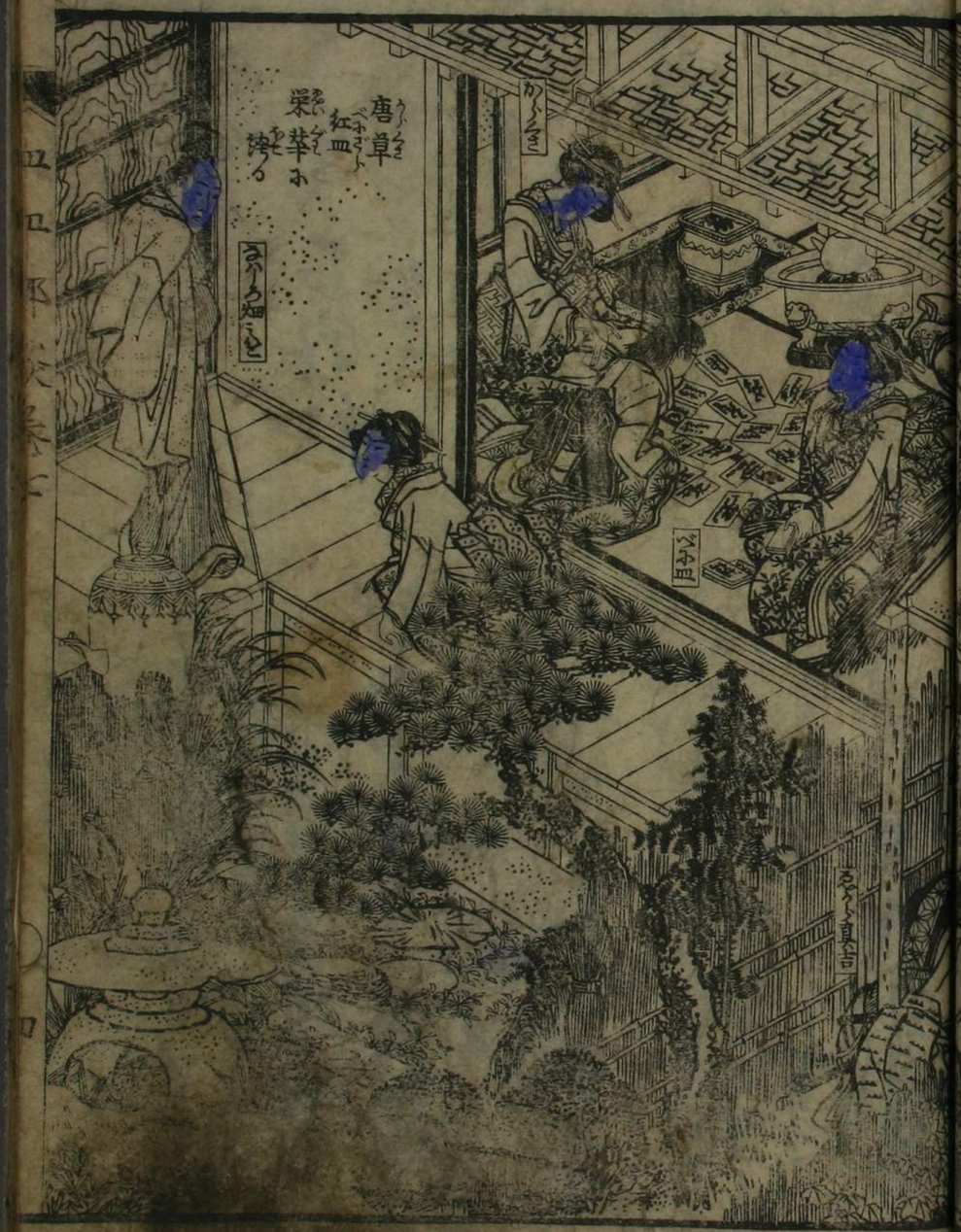
つぼね舎をぞ立てゝ、ほゝ、ゝ恥しゝ。ふき蒲団を横の垢冷えたる衿に
かゝゝ。顔さし入れ、もちろん流るゝ涙の雨いとをかしゝ。墓なくも天に明
うゝそのゝぐたれ、ゆゝあゝ紙ぶ後會を笑ひ、起つ、れとる主従を目送る。
亦主従の外まゝる人なりけゝ。

第十三　天目法印ぶ夜川の秘禊

姪を佐て美玉を洗る

次の日ハ果敢なゝ暮て、第三日ハなりよろ。波るハ豫てより。今宵かゝぶ
彼郎ハ、ゝまゝ世るなゝゝと宣ひゝぶ。新利根ゝ叔母ハ消息して私ハ頃の客
あり。つぼね舎いゝ蒸るをいゝあせん花延ゆりの。めぐされ後きる屏風
一隻新ゝ会一具餅果子一折櫃ゝとのゝゝ潜ゆふこの夕れハ賜
ひしそぶ儲ハいそゝゝて。委細ハ沼ゝゝ走書して遣ゝ叔母ぶ良人ハ
村長なるべぶかゝりの物ゝゝふゝ公ゝゝひつゝもいと易てゝゝとく。

獲ゝ人して贈来ゝり。波るハ千くの黄金を獲ゝしより。ハ欲ゝして皆
鈌皿ぶ子舎ハ、ゝり入れ。今宵ハ此三の儲あり。前夜ハまゝりのゝ子結髪
去ゝ。ゝとゝりゝ勧めて鈌皿ハ浴させ抗ゝ破ゝ床席薦ハ花延ハ敷
隠ゝ。敷る壁ハ屏風りて建隔ゝ。彼味噌辛ホみちゝせゝ。ゝ宣べ物の
倒れゝゝゝ。生憎ハ音ゝゝ。鈌皿ハ只影獲ゝて。胃のゝらゝく騒ぐゝ。
ゝる行ゝ。甲夜より大両陣そゝぶて。窓を撲音碎くゝ。ゝゝぶ。
主ゝゝも。渡るハゐゐなゝて。天の河原ハ鵲の橋を彫ゝ心ゝ斬ゝぶ
儲をゝゝれども。ゝゝやる此両を。ゝりて郎ハ来ゝ。接吻ゝゝ。
同ゝゝいゝく吹あれ。いとゝそゝりて夜とゝりね。慰ゝゝく弘法寺の鐘声を
慢ゝべ真夜中ゝ。今ゝゝて宣ひ絶ゝ。波るハ庭門ゝる。渚折戸を潜ゝて。
紙燭ゝて縁煩ゝる。遣戸をゝゝ引開る。簷下ハ走り入るゝのゝ。とゝれば


唐草
紅皿
栗栄ホ
沈る

この所
前段
七年後之
缺皿
患難
寒夜ホ
刺後ヒ

左金主行く。笠笠の紗風よ彩離られ菅蓑の下まで濡れん。ゆくるされ
胄つぶれて。途の艱難と同慰め。そゞかぬ竹縁へ枝の巴でいそゞしく。草莊の
紗を解まわ〳〵せ真吉が足を濯ぐ行よ。こや彼処へと誘引ね。鉄皿かこれ
彼の耳語てえを笑ゐ〳〵。恥〳〵そ生近へど。途をぢふのうるひあれ。さてそへ
困ドゐひけゐと密ゆうみつふ声いと可愛〳〵。左金ハ両よ濡うる紬を火桶ホ
翳〳〵ほとりうふ。彼少将が百夜の雪も今宵の両ホいうぞうゆ。ぶき。
霽りやさるとゝゐとひく。ちうぶも夜を深うり。とゝへば真吉うち微笑さ。
のさゆ殿だり。滅心ちゝ〳〵ゆさふ仰られど。〳〵僕微り甘ぶ。ひとりやかうひ
ゐふと見さへふ浩まるを。渡ゐハけゝと笑ゐて。盃を勧る行よ。左金ハ瑟を廻して。
彼此をえ〳〵れば物大〳〵ハ整〳〵。前夜ホ仰るぞうもゐふぶ。化粧ね付ぞ匂やう
ゐり。鉄皿が面紅ハ只璞を攻るごく。沈の撲を削れる如くいう愛さて〳〵浪ほし。
真吉ハ渡ゐが微妙ちゝり。ともうふ誉て。途の艱苦をお治〳〵。或ハ感嘆し。
或ハ笑ひ鳥〳〵て。主従盃をめぐ〳〵ふ殻三四種ゐり。三日の夜の餅形のめく。
折敷ホ盛てりてさえゝり。左金ハこれ〳〵の物いうはしてりとゝのへんとつぶ〳〵し。
夜ハ只深ゝ〳〵れば。臥房へ入りね。今宵ハ夜長ゐもいと愛さ〳〵。主従ハ蒸襖
只一重を隔つ睦語を。ゐづれゐ楽〳〵ふざるべ。頃ハ四月の下院ゐれば。ち
〳〵り啼杜鵑ホ。両ハけゝりて蕭ホうるりいとさへ短夜のその曉ぐ〳〵り
熟睡〳〵れば左金ハ巳の比及ゝちゐ。そ〳〵うち数るゑ窓の戸引開〳〵
えれば。ゐ細雨ふるゐり。渡ゐハ。ひ〳〵し〳〵。盥水まねふ。ぬきこなく〳〵時ハ
接りね。真吉を呼て〳〵ゑ退ふんとて立ちくさほを渡ゐ。急ゑ推ふゐ。
神詣の君さちハ。首途の日より四日なのね。縁いそゞせゐふも。濱の漁猟
名所ゐゐ。漏ゐゐ〳〵ゐ。ちふ明后日の比ゐふぞ。ゐるゐりゐ〳〵と

推量仕るし。折ふし雨もけはしくふる。今一夜さ留り給へといふ。ふ
ふ。且つて早飯りて玉くしをそろりさせる葉ハ呉れども。鉄皿も
居ないてまゐる。いと恐入しけるあうゆうちとみて。をりく拍子ハ。
母のうへ。姫身のうるゐど。露ぞろりも繊〻ぶ。又恨る言葉ゆるして。親の願望
身の久後緯の序をもーまさぐ家号大人の庇蔭ぶせ給へといふのこ
つぶうへらも歎うど大ぶこなるゝ。ね孝心よ。左金時忠ハ坐湯ちちみて。
との君のゐるゐぶとふ外他るゆるー。かる園坐ハるゐぶ日を徒歩とーも
ちちねふ渡るい母屋ゐる。紙紫琴をりて糸りね。鉄皿ハこの年頃衣ねふ
糸ーそゆゐとれ十ゆまり三の緒をいろぐろ。と推辞ども。左金ハさ〻〻真吉
渡るホゞつりなく勧るふ黙止ぶ〻〻。ちのびゆうゐぞ撫将と玉指斜はて。
歌ふとふ纖〻ふ谷の流水膝ゐ流るうと怪れ。ぶ〻ぶとふハ現くとて。

巌の松風答ふかのふうと凝ゐ悲猿巴峡の声。遠音智度の鳥。笑ふぶ
ぶく絡るぶぶと。哭ぶぶく。泝ゐふ似ふり主従一唱三歎して。その日れ暮ゐを
ちぶざりゐり結延ゐ母屋のうゐゐ人駄散動音して上総ゐりゐ。せゐしね。
真ぶゐゐゐりゐひね。と叫びーゐぶ。鉄皿ハ吐嗟とぶゐり。琴ゐのゆりつ。ちそれ迷へべ。
左金主役ハ南柯の遊びその真竭てゐの弁足の踏とゐちぶ。渡ゐるも
胃ハらち駆げどぶゐゐれおりちーて真吉ハ目を注ーけゐとハゐひうけぶゐつゐ。
ある便ゐー。と呼ひて。屏風推畳をれ巻ちあなどちる打ゐ左金ハ見ゐ
追れつ。ゐひとう置ぶゐゐとれ。破席蕎の破縁ゐ足をゐぶれ〻侵僧ゐる。
緯の形勢いとゆし鉄皿ハ恥を隠せー恥を又かぶゐをゐぶるーきいゐぶうゐゐ。
只ひぶ西の霜とともにつぶ消よとゐのを袖の露をゐゐゐるぶ。ぶ間ゐ
真吉ハ縁炉の柱ようゐる管養を引ゐろーて。貴子の下へ推隠ー屏風ゐ走い

壁の毀るる所より推出して大くしかりおきあまれど主従かくてそこんに夜色
さへとして今は生ぐしとく隠しもあるじ怪。といとぐ波るるも今更術なれば
夜の物と出納う押入とらふ袋戸を且ちつまりやと門閉ぢ左金八棚ふ
掛つそぐ引つふ内と入りね真吉も主従續く跳入るとそうぐ暫柄額を礫と
撲して痛さやうき忍びめくと主従面をあつ口を益しくたいた居るわどふ
波名ぶ外面ようみぐそその戸を引閉ぢ人の来る音をうり彼人ふんと
ぶひしうぶ緑板を遠り生く次の房ふ立躍ぢて何らうとう又文ぢろい
強て毒とうぶ。さる行ふ片埒ハ長途の疲労と物ともせど緯ぐみあれとらふ
ぐりふ奥へも入ぶ衣もかそぐ缺皿ぐ子金もまて例の窟ようぢ駆れ。
業内もせど礫と用ふ障子の骨も血をとけね母のちうを汲う行て立迎ぢく
壹ぢと著そうくうちほう笑とらひしうりいとくゆう黙なく涙ふせるひれいと

紋くうう付るる已姉君ふそう小素太もさてそん疲労ぢもひけあ父ふいはる日
ようふ不憚ふれるひく今ハ退出のうもど異なくぢくしまんぢ毎日ふやメえさせ
ぬくべはぢいうあぢうといふせも果ぢやよ缺皿そうくしれを宣ふる五角の
ぢあう還りしを鬱悒とこそらふるぞふ紋ぐとあんや一年も三ヶ月も
かくてそと願ぢろん況孝行ふる少女ぞ已父のくくふせのうねも和女郎ぐ
ふるあハ僥倖さるのくべ又雑沓して髪を結髪を出邑の冬成ふるぐく白粉
ぬひうるちる比のえせ連歌ふ沼代の建立下女ハ首ぐうり況首ぐうり百大白
なる半身美人ふるりるひね盗の昏睡ぢるも心あてあるといふ造の常言ハ
和女郎ぐるく前後拵る化粧三昧ひあそのうくべやん答ぐ
世の美淡ぢあくんぐくんと時ふ罵りふ彼此ぢそのぢあるね母親のうるかと
ひふ戸棚の内立も立れぐ笑くくのあるとうれね胃くるくさの顔ぢかうちれ

夕紅葉に袖を染めて伏沈めば。庄坂え竹縁に昨宵左金が脱捨る草鞋を
侍とうんでされバこそ淫奔婦女子が夫ならさるに献手を擇ずばそこらあたりの
里人を引入たるかと疑ひしは。ころかくろねとそらやがて捨て夫を逃しても送も
澄据の泥草鞋ハ定に親の面汚し。然くれ如此と告まうさバさぞ誉させ
のふふめ腹へ立とも腹を藉さぬ母がひろきこころにまん下さばさりとて後でふやうふ
しえつぶれとらぬ草鞋ハ二王をあらの皿訂利生られハ五百貫が預るぞと飽まで
罵り辱しめ衝と出て鈎を草鞋に突立てそろ侍とうろく鉄皿が在の上に
さし翳し綱を引てあざ笑ひ母屋のうちへ入る音を次の房より闚覦る渡辺
吻とつく息の緒すぢ縁類の遠からぬ疾との隙ふと門開る戸棚を
出る主従ハ笑てはしる家刀自が腹きつなれに嗟嘆し左金ハ母なる鉄皿の
はうりふおとく脊を拊ながらでもかなしき母刀自の呵責をまずれハうられ出るふと詞に

吉る雨に笠ゆびり。袖ぬらさそのこもとべもなし只うちきつろひたがらえ今鉄皿と
喚れしのこ何人のなるか知らねど身ハ楓とらかなしびや彼人の憎むものらしくても
なる母ありや名づけざるてそあるべき事哉好し名にこそと擇ひきたらる
面り向うらふさ恥しさに回答をゐせぞよくと泣おとうかなりしが渡辺も
慰めなく嘆息し縡えやとこふ迫り侍れど草鞋を取られしハなる母事を侍る
しさまべてそこの郎がさらまかよろせまうんとハ母君もひらけあへだ第一に傷
杖と打まんと思ひ侍りしにころがみ崇らせまうねハさらろゐがらえ半ゆ侍り
そらとまれかくもあれ瞞目覷覻まうかふと餘いひ難て眞吉ハ目を注されバ
うち点れおまりに縡の忙しくて管養をのこなり隠し殿の草鞋と送れしハ
寔ハ物怪の幸なり疑れすふとも夫を誰とさふいふバ何るものとうさべれそらく
還りまへしと耳語つ引主の袖振捨がたく留ざる左金ハなる母懇ハ鉄皿が

慰めく。昨宵のまれ蓑の麦稈ひもあくぞうち被げば真吉は遠くちのが
草鞋を穿し進ぶせ人りやうると主後は後ゆつれ又先ようち庭へまり戸を
推開く。笠を翳して出ゆく。彼貴せと渡るが指し示せば鉄皿はゆをゆ改浅
搔てゆ涙の両み目もつるべ。おほ歎たる渡るゆ。ほ丸樹下間庭を
ゆるめてつん居ゆうさる行ふ片埦へ彼草鞋を携ゆく。後て母屋へかくるれど
ゆ問諄くと罵休ぞ鉄皿が密夏を助ふのは渡るくと猜ちるとて猜
なぐく渠へよくまを狎して。紅皿が媒嫁させんと豫てゆくどこれを責ぞさられり
密夫を隠しゆることりやと乞りとなく忍ひしゆべ紅皿は彼子全の闕窺をさせん
とてそが旅衣を脱更るをいと遅しとて焦燥ぞみあ。継搗素大夫は日夜の
勤番稍果ぞ退出んと考ゆ体祈女房子ども上総より還りぬと聞えつべ
これもいそくゆりまつ片埦が眛しく。罵る声は呆れまどひてまづその故況

問んとまろは片埦はそやはえうりて。安否も問ぞ彼草鞋を目前へ推出。これ
商せ鉄皿は親のをゆれをよりるゆ。て世をは人をも憚らぬ辻君夜裳みどの
でく。黙のをとを紙引入まて昏きくみどうぐゆれをおん牙はいまぞ郎ぶぐや
をまるけふこは岩ひうげざうけん吾倚が早はかくりしうが鯱くをとを迎せう
ども。草鞋を穿に眠なくそこれうち捨く走うゆれおん牙は臨時の加役ぞく。
臺の城へまるりのぶ苗守は叔父公を君をそて溢奔りのを備せまうれね
かるこをまいぶをとび兄萠を傳くゆてしうば推籠らせく置つるを僻事を
のこいのれゆん斯いぶ偽なくぶ。みづくぶ彼奴は向ゆくをとをしも懲ぞてだ
何をりて人を使んいふびうやと驀地ひて席藁鼓て敦圉は素大夫へまるぞく
呆れまどひく。縡の本末問も正さぞ困ど果く歎を孫女の子は母の軀よるる
固ようおん牙は任用せくと今文ゆこれいろみをびゆそは伝と懲しなまくしと

真ぐちて回答しつゝ片塊ハ衡と立て又彼子舎ふい急れて鉄皿を引立て。
薪糂粇桶など納る物置といふ敗庫に突入れてそが横戸ノ鎖を固しつ。
鍵をバおのが腰に著て紛くぬすびんくふぐ渡るいとのくそりるぞふりしく
思へども救ひ出さん術なさに只戸口に立壁に著るのびく々に問慰めても内よりハ
泣のミ応もなせざ次の日真吉竊に請来て鉄皿の安否を問左金が艶簡を
遞与せしかバ渡るハ縡の趣如此々々と委細に告真吉ハ笑てうち驚れのみ
痛みし彼君ハいかなれバ恁までに不幸なるかあひやらんおん身が傍杖
打れねのミこそいるなれど恙なふ不幸の中に幸と身を竭し隙を窺ひ
勤て慰めまゐらせ給へ縡緩ならバ謀ふべき人に隙なくて竟に便宜を
ゐざるかふん還りて殿に告まうさバ又せんすべのあるべくもあらず
まさしのへと密語果てかへりてゆきとてまさに渡るハ彼艶簡を進らすとて

侍女もがなと云ふ程ふ小素太ハ独楽を失ひぬとてそこら捜索めつゝ来ぬ。
是をよきをりふせんものをと抱きよせて問慰め孺子の独楽ハ竊なへのうち竈
らまでをあしけん土庫に持るらし母君ゆずりしまひぐと取りへとさしら来ぬ。
小素太ぞ奥へ走り出て如此々々と告るへ彼処を開くとしそがせども片塊ハ
紅粉褸ふ鏡臺を推よせて梳る最中なりとのあがふまとらうふせん髻結
をうやて侍女へ瞞せども絶て聴ず蹉跎しつゝよくと泣稚子のまへ親かひ
なくて腰なる鍵を投與これもりて出て紅皿ふ戸をひらかして独楽を取らかバ。
舊のごとく戸鎖せよとよくいひかへ忘れても紅皿ハいふにこの鍵を遣す
まふなと説諭せバ渡るふかんに莞尓と笑て鍵を撿取まへ紅皿とふ
浄まうやゆれさりそん呼ふるに応をせざりけいらでう愛禁時も猶豫と
そのうちふ物置庫の戸口へ走て出行き渡るハ参のゝあれて件の鍵を云ふと

遽しく戸をひらけば頃日の南風に蒸れて補ふる塩の無き糟糠の臭気鼻を
穿て厠瓶に乗るも打ちせられ炭俵あるは古葛籠の布の剥くる紙老の
骨のごとなる処狭まで納めくまでは内暗くして蓬けく憐むべし鉄皿は嵐の山彦
椎子よりお戸隙もなく塵積る荒畳の上に伏沈み煤る皂き蜘蛛の網に
肩も頭髪も貫縁れく男声細る末枯の霜夜の虫に異ならず涙ぐむ目を
入れてひと痛ましく出くども明る地までもあらずして独楽と索る母らん鉄皿が
懐へ左金ろ懸間と差し入れく生の青びくることと窃かに告なさせきのちうり
物ならずねよこれよりて餓と凌ぎまくとらひあるとき紙に包し焼薯は遽しく
遠かは折紅皿奥より走りまて物ともいらずと暴かれる戸を引立んとせられけるが。
涙ぐるは驚きて声をかけつまどひ出るを紅皿は倍と疾視そるは誰に許されて
との戸鎖を披たると結問まで頼うち叔め孺子が独楽を取せんとて是ありて

来ませし故なりといひなしあへずその鍵を捥ぐがごとく豪集小素大が何ぞとなるものぞ。
そりおくが智恵をつけるにや孺子もちりむら人独楽は荒の扱ひく物ならねば人ろ
此内へ入るべき天窓の皂は荒たる人を詭欺るものなれといひうく中に出たえん。
涙ぐるを見入りて俄に気色を染げてそるなる咎はかられども此子が開よと
いへども開ては却疑ひまする母ぞの余そる侍まうらも置れと物いひ過せしことも
そらめきのなりけるに出てけるひそと咎めん勧解つ先後も揃ね板戸引よせて。
楚と鎖ては又更ようち明ざれ身の顔ひいる恋に入は鉄皿が行くかなひ居るく。
をとくしとは香るもなく茶純子の帯の端鮮をもて引結び足より素足にて
草履を裙よ折りらす身のくまを抜て悠くと母のはとりへゆくあれば。さは行る鉄皿へ
藻に住む虫のなれらふと音にのみ鳴るともうるくなるに入を苦あるき親を恨き昨宵飲く夜
けふ続く日袖乾あへもつくづくと涙の隙よもも声ら音するが母御前へ正すれ夢とも身を喪ひ

歎きしを今ふ達しまひらせをまりけるが。これも又手児名の神の示現より讖ふ心
よりける果さ。靡れ初る糸薄仇に結びし妹と徒の縁しハこれも身を殺させらる
物の崇ふてそさりとても自殺せバ不孝の又の不孝んぞこの俵に餓て死を俟より
外なまべ臣と思ひ決めて母の為身のあふ経を誦し佛名を唱る折せらるく渡るが。
戸を闘ふぬ内ふ入りて左金が艷書を逼与せしかバ是ぞさしんへからく不宜土の
障なるべとて人へ去時うらり戸の隙より差し入て夕日をうけて読む玉章ふおもふ
限りを真成が筆に因とそろそろひのいよ涙へとんぶ落る働へ文ふい与するるべん
後もかゝはりのとそ人まへつんさせど細かふ引ハ裂ども玉刺るゝが命より惜けて
胸に當られ抱れたつ二夜を暁まで起るゝ彼焼暮へつえもかくふえて死なんと
思へくし。その明の日素夫夫へ墓の勤番なれば朝より年りねかくてしにと片境へ
きのふ紅血が怒ふ乗して渡るを情なく罵りる縡の始をその折ふそやせしかバ。

竊ふ女児を喩せり。渠ハおん身が婿縁の媒妁させよといふれしぞや忘れるひし歟
何るゆゑんありて渠を怒らしめひそと叮嚀ふ誨よゑしかど。その母意ふやかくて
けんおのが傍に人なき折竊ふ渡るを招よせ旅の留る世し賞とて艤亭もなど
脱ね衣一トかさね與ふ渡るいよ疑ひ惑ひて只管推辞て受ざりしかバ庄境ハ
怎かとて膝をすゝめ吻をさしよせ日来より与ゑるを明々地ふ説示し。且真吉ふ
相譚て。とかくもして紅血と左金のねしふあかしてさえ縡成とありかぞりの衣
「ト今のいを ふて止んや。そのさハさらく真吉ふも如此くの物ハ被んいと成
がるゝんとす主の為あ身の為くよろづそなくの才学ありて縡十分な
きようぶ忠義と思ふんぶらくて見よりし。と真成よ密語ハ渡るハ
呆れて顔うちまもり思ひがけなき家刀自の底意をきれハいとゞしく浅
浪りながらもいる毎ふ応し宜ふすしハちょうるぎりさりとていそうせ ふとも。

縡速ハ成ざらん真吉がしまりうゑバおのが公の及ん危殆遍もよく相譚してかへり
ことハ心得え侍らん。密望を遂させまふその折にて此あん夜をおり忍場侍りなん
それまでハこの儘に棄めおかせ玉へと回答果て立よりしのこ乳母も片堀へ。
渡るが兼ねるおりちに些安堵て又つぐとなる紅皿が行でう琢磨える
衣飾るとも生まゝ随ふる鉄皿が縹致ハ及びがたし。志ハ伸に彼女婿の刀祢あらく
あらへかよひまでり。鉄皿をみるとあらバ仇となとの仇ならう後日ハ変る秋のころ。
外へ落さん世話よらふ疵を償て母屋を取て悔なくらんとひかし志かまでや
此度の便宜をりてまづ鉄皿を結果後をくせんのとと腹に深念を著て猛に
真間へ人を遣し。叔父の天目法印浄弁を潜かに招よして件の趣首尾おちも
なく告まふせけれバ。淫奔女児をあん身にまかふをべうかふし老たる人ハいと
つろた女を愛まほとうのべど役近の別荘に隠しおかバ人にあふれん声までふ嬲く。

その後ハ如此〳〵にせよと密語ハ浄弁ハ真白なる鬚に腕の舞ふをぞ覚えぬ。
満面の皺を目尻によせてうちほゝ笑年来敬して志を離るゝあたはざらざり
和女郎さへ叔父を叔父ともせざりしに要あるとての神馮を別儀なくば湯杖より。
まゝずそや頭を掉べられど艶く媚くとして甘美なる年も二八の鉄皿を好まなかりしが身に
進らせんと今すでに賜る。要骨の疼も此まゝ津の宿柱を女に沽却して
身價を此の懐へ収めよとらうてハ牡丹餅なりて尻を敲かるゝに異ならずと物数
多く宜ふる壁に耳あり孔に目ありてやおもひ得たりけるがかの悪人
真の再娶紅皿が仇となるべきものとしりながらちも置れず[illegible]
ゑぐりと知る白する点呪状ハ皿に盛る[illegible]
その夜ハあしらひ素大夫が勤番の留守なれバとて彼味噌[illegible]
さればかのが臥房に入りしかバ時たり[illegible]

天目法印
東宗舎
羅文

着て手燭を袖に磬して庵漏のうへ潜ひ出て彼此とうろくれば一對の神酒徳子と
大元なる尾皿に塩を枝形に盛る中へ小松一本推立てるを恵の神と軟てあり
とゝ究竟の物なれとひとりごちて今おもへ。えとうぐゝに物置庫の戸口へ運びて
ひそかに戸鎖を開て門に入りて手燭を抗て熟視るに鉄皿に一昨日より塵芥の
中にうら竜られ食ど唾ふに法曉を心神労て果られ門に入る人ありとかもれ
ども改を撞くとれをうる乳力に移て少くの人正を見て厠の檐に移て梅の香を
奪れて萎むが如く泥中に捨る珠の光を埋て砕ゆ仏ゝり物の哀なるかゞ
ちくね浄弁ゝられ。娯一良てつれ居る勝の戦へ出ることを変固めやをうるゝ
み。後より。類髯揖著やよ鉄皿。ゝ行りの習俗とてゝ感ゆかなてのるとれど。
親の怒りも理ゝり生ざるに任てゝ過失のいぞ
くるあれさとて俄頃に暮れ色。重縁うるとゝと二親の擇まめるに新郎を。

えぶしうぐら吾得ん今宵直さゆ別荘へ行てゆくゝとめれど老ゝ恋情
なくて二世の約を今こそせやとゝふ嶋臺に恵みの塩に松千代万代の後
まで也ゝ柄の銚子ともうるべくとの神酒徳子夫婦一對陰陽和合山伏の
増礼に注連ぐしとぶの神垣ゝ中臣の祓浄る心経に般若孕ゝ
変生男子祈出ても修験の奇特胎蔵安産金剛界両部神道真言秘密
かぐろ正ゝ誓文ゝ左ゝ帯ゝ右ゝ伸て引ゝ
辛ゝ呵責ゝ塩の松衝著られて鉄皿に王ゝと涙ゝ沃ぐ。袖を翳て身と縮め
娘小松みさをかえぐみつくし久米のさゝ山ゝ恵即妙
一首の歌ゝ。ちぐるゝ浄弁も愧くゝ。ゝ又ゝふゝりけり世乃
童子ゝの歌を。盆皿ゝ。さゝてふ山ゝ雪を根とゝ。ゝ松ゝ沈り
てぐ伝ゝ。かゝてゝ下に拙ゝ久米の佐良山ゝ美化ゝ。古今集ゝ

久米のさら山さらく昔の人の恋くるやうぞ又みつくくとゝ久米の杭河。
又伎とゝ元ともあり万葉集第三巻に伎為酢す久米能若子我又見津
見津四久米能若子我ゐどゝえさう間話休題且て天日法印ハ啊くとゝろ
笑ひ。ゐろありく欽姫小松樫ハかゝぐと旅ぐでもこの木造ぐ浜りて枝を繁ゐ
透し。縛郷く此方へよせ起きんとも又臥せんとも。意の隨よせぐゝんやとひめくど
又抱きとゝろ紙辛ぐて振放浅すしや。物体ゐや後血絡ハあゝぐとも七ゐ
ゐゝゐ吾俗ハ再姪犬よ等ゝ元結婚ハ天麓の所ゐゐ。ゐゝの乱とてゐゝ
ゐやあゝんぐゝん甚処退ゐゝと敦圍ぐもよゝり果ゝ体特場のゐる身きゝ声
さんさぐゝゐ。ゐゝ本重ゝの浄弁ゲ又の湯敢ゲ中ゝ根ゲ身の上
ゝ物やゝい後の者の解ゐる冷軍絡ゝ

皿皿郷談巻之七終

大川蔵